

トランジションの危機と若者のセルフ・ナラティブ

——韓国若者世代の「剰余遊び」を中心に——

○常葉大学

福島みのり

1 目的

若者の学校教育から職業世界へのトランジションが社会問題となって久しい。これまで教育から職業へのトランジションをめぐる数多くの研究がなされてきたが、行為者（エイジェンシー）である若者の職業意識を高め、認識を変えるなど、教育的な側面からの解決策が主流を占めてきた。本報告は、職業意識や教育の側面では捉えきれない若者の内面とつぶやきに注目する。特に、自ら「負け組」であると自称し「剰余遊び」をする韓国の若者の姿からは、後期近代社会の新しい主体形成の過程が把握できる。このプロセスを通じて、これまでのトランジション研究において注目されてこなかった行為者の側面を浮き彫りにする。

2 方法

はじめに「剰余（韓国語では‘インヨ’）」論の登場とその背景について検討する。「剰余」は2010年前後にインターネットを通じて若者世代を中心に「競争から脱落した人」という意味で使われはじめたという点で「自己卑下」としての表現といえるが、高学歴失業率が上昇する中で、自らを「剰余」と称する若者が増加していったことが背景にある。次に、「剰余」と称する若者らによって出版された雑誌『月刊剰余』（2011年11月創刊）を分析する。執筆者の多くは未だに社会にポストを得ていない20代～30代であり、文は一人称の視点で書かれ、自らの生や考えが描かれている。「大きな物語」が捉えてこなかった若者の声、つぶやきは、セルフ・ナラティブを作りだし、そこには新しい主体形成の過程が見られる。

3 結果

第一に、若者たちの「剰余遊び」には、これまでいかなる若者論にも参入できなかった「声なき若者」が自らの生に対して積極的に語りはじめたという点が見える。「剰余遊び」はある意味、若者世代に見られる差異を包摂し、その中で類似性=社会的課題を発見していく実践が見られた。第二に、若者らは「剰余」という言葉遊びを行っていく中で、今日の後期資本主義の体制内で非生産的な活動、時間、振る舞いのすべてが「剰余」になることを見抜いたのである。この点からは、G. バウマンの「グローバル化された世界の労働と余剰」に代表されるように、韓国という地域性を超え、同時代性と普遍性が見られる。こうした彼らの言葉遊びは、結果的にこれまで非生産的と捉えられてきた日常、振る舞い、身振り、関係などに「意味」を付与する行為につながっていた。

4 結論

これまでのトランジション研究では、行為主体（エイジェンシー）をいかに社会へとスムーズに移行させるか、その政策に焦点が当てられてきた。この観点では、移行過程において「つまずき」を経験した者は「自己責任」の下、ケアのカテゴリーからは排除される。だが、移行過程につまずきや亀裂をもたらし、自らの生を「剰余」と名乗る若者らの実践（＝セルフ・ナラティブの創造）には、必然的に剰余を生産せざる負えない後期近代社会の矛盾を見抜き、労働倫理、自己啓発への強い批判意識と自発的拒否意識が見られた。若者のトランジションを考察する際、「剰余遊び」のような若者のセルフ・ナラティブとの接合が必要とされると考える。